

ストリートチルドレンを生まないための支援体制 ーファベラにおける「子ども組織」と「第3者機関」の果たす役割ー

2020188

宮里 妙子

研究の目的と方法

現在ブラジルは経済成長期にあるが、国内の貧富の格差は非常に大きいものがある。上級階層・中級階層・下級階層・貧困階層と生活レベルを分けるならば、ブラジルで一番多くの比率を占める階層は貧困階層よりさらに下のレベルである極貧階層である。都市部のストリートチルドレンの多くはここでの生活を強いられている家庭から生まれてくる。ストリートへ出た子ども達の多くは麻薬の密売人となったり、売春をしたりして生命の危機にさらされながら日々をすごしている。そのような彼らを支援する宗教組織やNGO組織は数多く存在する。時には国際機関と政府が協力してプロジェクトを行う場合もある。しかし一度ストリートでの生活に浸ってしまった子ども達をもう一度ファベラの家庭へ返すのは非常に困難なことである。そのため、まず考えなければならないことは彼らが本来生活すべき場所であるファベラからストリートへ出るのを防止することである。

本来子どもは環境さえ整えばエンパワーメントする能力を持っていると筆者は考える。現在苛酷な生活環境のため、コミュニティとしての機能を果たすことが困難であるファベラであるが、子どもたちへエンパワーメントする機会を作り、主体性や責任感、他人を思いやる気持ちを、成長していく段階の早い時期から身につけていくことで、長期的な視野から考えた場合、彼らが成長するに従いファベラの環境が改善され、そこからストリートへ出て行く子どもたちも少なくなると考える。子どもたちがエンパワーメントするために必要なことは「組織化」である。「子どもの組織化」により子ども一人一人に役割が与えられ、責任感及び連帯感を習得していくため、エンパワーメントしていく過程においてより効果的な環境であると考えられる。

そのため、ファベラ内に「子ども組織」を作ることが必要であると考え。ファベラにもストリートと同じように数々の支援団体があるが、そのファベラに必要とされていることが必ずしも外部の支援組織（宗教組織・NGO組織・行政等）に上手く伝わっているわけではない。ファベラの自立のためではなく自分達の名声のためにプロジェクトを立ち上げたり、一つのファベラに支援金が偏ったりする場合が多々ある。そのため極貧階層のファベラへ外部組織からの支援を効率よく行うための機関、「第3者機関」が必要なのではないかと考える。外部組織がファベラに質を伴った適材適所な支援ができるような立場に立ち、相互間の情報提供あるいは財政面でも汚職をなくすため監査的役割を果たしたり、支援者の人材育成をしたりすることがこの「第3者機関」にできたならば、ファベラの自立へつながり、子ども達がストリートへ出ることを防止することができるのではないかと考える。

本論ではこの「子ども組織」及び「第3者機関」の役割を明確にし、リオ・デ・ジャネイロ市のストリートチルドレンのおかれている状況と照らし合わせ、ファベラの自立にどのように機能するかを考察し、結果的にファベラが子どもをストリートへ出て行くことを防止できるようなコミュニティーになれる可能性を明記する。

論文の構成

第1章	問題意識と研究目的	1
第2章	ブラジルとストリートチルドレン	
第1節	ブラジルの概要	2
第2節	ブラジル都市部のストリートチルドレン	7
第3節	都市化とファベラ	11
第4節	ストリートチルドレンに対する支援	15
第3章	エンパワーメントとコミュニティー活動	
第1節	インドの働く子どもたちのエンパワーメントの成功例	17
第2節	ブラジル北東部でのコミュニティー活動の成功例	20
第4章	ファベラへの支援体制の不効率	22
第5章	「子ども組織」実現のための「第三者機関」	27
第6章	結論	33
	参考文献・サイト	34

論文の概要

本論文は以下のような構成で進めていく。

第 1 章では筆者の問題意識と研究目的を明らかにする。ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市においてストリートチルドレンの支援施設でボランティアをする機会を得た筆者が、路上での生活を強いられる子どもたちと接することにより衝撃を受け、そこから生まれた問題意識と、社会から排除されている彼らが、彼ら自身でそのような環境を変えていける可能性があることを明記する。

第 2 章ではストリートチルドレンの問題を考察する上で必要であると思われるブラジルの概要及び彼らの現状を明らかにする。第 1 節ではブラジルの開発の歴史及び教育制度の問題点を取り上げる。大土地所有制及び 1964 年から 1984 年までの軍事政策により貧困層が出現してきたことを整理するとともに、教育を優先としない政策のため、富裕層と貧困層間の教育を受ける機会に差が出ていることを明らかにする。第 2 節ではストリートチルドレンという用語の定義をし、彼らがいかに危険な生活を強いられているか、各組織の支援を受けながらも、その状況から抜け出すことの困難さを、実際のインタビューを元に明らかにする。第 3 節ではこのようなストリートチルドレンが出てきたファベーラの状況について説明する。ファベーラの発生の原因である都市化の歴史について説明し、ファベーラの生活環境について触れる。第 4 節ではストリートチルドレンに対する支援について整理する。まず法律と子どもの権利条約の批准について述べる。ブラジルは青少年の保護の移管しては、世界でも進んだ法律を有しているのである。次に、支援組織について述べる。公立の支援組織及び宗教、NGO 等、筆者が訪問した施設を含める、ストリートチルドレンへ対する支援組織についてまとめる。

第 3 章では、路上で社会から排除されているストリートチルドレンであるが、機会さえ得ることができればエンパワーメントすることができ、自分達の環境を変えてけるということを、2つの先行研究から明らかにする。第 1 節ではインドの働く子どもたちがのための NGO の活動の紹介であり、自分達で組織を作りエンパワーメントしていく過程について述べる。第 2 節では、ブラジル北東部のある州で実践されている、コミュニティーの中で子どもたちをエンパワーメントしていく活動について述べる。

第 4 章では、筆者のフィールドであるリオ市における支援体制の現状について述べ、支援の不効率について明らかにする。筆者はストリートチルドレンを生まないためには、ファベーラのレベルで対策をとるべきであると考え、さらには子どもの組織化について強調している。そのため、この章で取り上げる支援組織はファベーラに関わる組織であり、さらに子どもに重点を置いている活動している支援組織である。NGO、政府、宗教団体等各支援組織のファベーラに対して行っている支援について整理し、ある程度組織化されたファベーラへは支援が集中し、組織化すらできないファベーラは支援の対象になることも困難であることを明らかにする。

第5章では、このような支援を受けることが困難であるファベラに「子ども組織」をつくり、公正で適切な支援を行うための「第3者機関」について提言する。すでに多数の支援組織が存在するにもかかわらず、貧困層特により貧困な生活を強いられているファベラの環境が改善されている様子は見られない。そのため、NGO、行政、宗教団体が協力、連携して活動する「第3者機関」が必要であると考え、この機関の構成と活動内容である「子ども組織」の仕組みについて明記する。

最後に第6章では、極貧層のファベラに「子ども組織」ができ、子どもたちがエンパワメントし、その成長に合わせファベラがコミュニティーとしての力をつけていくことができるかと結論付ける。

ブラジル都市部のストリートチルドレンの問題は近年映画等で取り上げられることにより、徐々に国際社会からも注目されるようになってきた。しかし実際にストリートチルドレンや支援者と向き合ってみると、現場は問題解決に苦しんでいることが伺える。筆者はまず子どもをストリートへ出さないことを前提にこの論文の前提としている。ファベラでの子どもへの支援は成功例のみが良く取り立たされるが、声を出すことさえできない人々への支援こそが重要なのではないかと考える。公正・効率的な支援というのは、全てのファベラに同じような支援をすることではなく、そのファベラが抱える問題に適合した支援を行うことではないだろうか。そのためには各支援組織が協力し、柔軟に活動する必要がある。子どもたちに本来備わっている能力を信じ、これらを十分に発揮できる場所が与えられることが筆者の願いである。